
神は何を思う？

桜花蒼衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は何を思う？

【Zコード】

Z9296S

【作者名】

桜花蒼衣

【あらすじ】

車に轢かれそうになつた子供を助けるため、道路に飛び出した大神響は、闇の中で一筋の光を見た。

『家族が欲しいか？』の問いに、『欲しい』と答えた響が目覚めたそこは……。

転生、最強？な主人公。NとBLの2つの恋愛模様が入る予定です。

評価ありがとうございます。これからも頑張って行きます。7/

プロローグ（前書き）

初投稿です。優しい目で見てください。

プロローグ

かすかな光に目を開けるとそこは闇の中だった。小さな光が俺の存在を気付かせる。

ああ、確か子供を助けようと、車の前に飛び込んで……。

俺は死んだのか。

『大神響家族が欲しいか？』

闇の中で声が響いた。

「欲しい」

俺は頷いた。

『この世界を棄ててもか

この世界？

今だかつて、この世界が俺に何かしてくれたか？

俺は、家族が欲しい。

俺を愛してくれる家族が。

だから、俺は頷いた。

「ああ、俺はこの世界を捨てる」

光は消え、完全な闇が広がった。

始まりは3歳の誕生日

グレンが響だといつことに気づいたのは3歳の誕生日を迎える少し前のことだつた。

何がきっかけのかはわからないが、ふと自分の前世を思い出したのだ。

前世、大神響は、平凡で非凡な高校生だつた。まあまあの容姿、凄まじい運動神経、素晴らしい頭脳。

だが、響は、独りだつた。

両親は揃つていたが、彼らは響に無関心だつた。どれだけ賞を取つても、模試で1番になつても、関心を全然向けなかつた。学校の友達は、勉強にしか興味がなくそこでも独りだつた。

そして、学校からの帰り道。道路に飛び出してきた少年を助けて響は死んだ。

そして今、グレン・アーダルベルト＝フェルトとして生きている。男から女になつたのは誰の差し金かは知らないが。

始まりは3歳の誕生日2

とても晴れた日だった。庭で遊んでいたグレンは、兄に呼ばれて振り向いた。

「ヨーリにいさま？ なーに？」

響の記憶を持つが、肉体的には2歳のグレンは行動も幼くなっている。響は、その口調に内心笑いながらも嬉しくて仕方なかつた。響の時には感じなかつた愛情を感じ、とても充実した日々を送っていた。

「お客様だよ」

手を差し延べる兄にグレンは飛びついだ。

3歳上の兄、ヨーリは、黒髪黒目で母と良く似ていた。

魔力の強いとされる黒を身に纏うその姿は、国中で評判になつてゐる。自分と同じ色をしている優しい兄は、グレンにとつても誇らしいことだった。

「おきやくをまつてだれ？」

「グレンも、初めてだね。アレキサンドル・イーガル・ツェリ。父さんのお友達らしいよ」

父のお友達という言葉にワクワクしながらグレンは抱かれていた。

始まりは3歳の誕生日③

コーリに連れられて、父であるエイス・アーダルベルト=フェルトの執務室に入った。

入ると同時にコーリの腕からピヨコンと飛び降りる。

部屋の中を見渡すと、父の他に、レイモンド・シックザール=ベルニコフ宰相を見つけた。腰まである濃い青色の髪は、黒に近く、薄紫の目は笑みを称えている。普段は優しいけど、怒らせると怖い宰相を、グレン達は、レイと呼び慕っている。

その向かいに、アレキサンドル・イーガ=ツヨリらしき青年がいた。

「よく来たな。アレク。俺の息子のコーリと娘のグレンだ」

「初めまして。エイス・アーダルベルト=フェルトが第一子、ユーリ・アーダルベルト=フェルトです。この出会いにハクヨウ様の御加護がありますように」

「はじめまして、グレン・アーダルベルト=フェルトです。こので
あいに、ハクヨウさまの『かご』がありますように」

コーリの真似をしてグレンも挨拶をする。

「これは、これは。ご丁寧な挨拶を。オレは、アレキサンドル・イーガ=ツヨリ。王宮騎士、第一騎士隊隊長だ。アレクと呼んでくれ。この出会いにハクヨウ様の御加護がありますように。よろしくな」笑う笑顔は男らしく、茶色い髪、碧い目にとってもよく似合つた。父の友達にしては、2つ3つ若かつた。

それでも、剣に疎いグレンにもわかるほど隙のない態度だった。

導かれるままに、父の膝の上に座る。後ろから抱きしめられ、少し痛いが、楽しそうな雰囲気が伝わってくるので、グレンはそのままにしておいた。

「それにしても、溺愛だな。エイス。国王としての威厳が台無じいやないか」

父、エイス・アーダルベルト＝フェルトは、ハクヨウ王国の国王である。

26と若いながらも、治世は8年を過ぎ、賢帝であると評判らしい。

ハクヨウ王国は、この世界の西にあるアステイア大陸を治める国。風の加護を受けており、風の大賢者が大陸一帯を管理している。時々、白い鷹がお告げを持つてくるところから、白鷹ハクヨウとついたと、レイが教えてくれた。

「いいだろ？　お前も恋人を見つければいい。そうしたら、わかるだろう？」

父の言葉に、アレクは顔をしかめる。

「俺のことは置いといて。姫さんの誕生日は1週間後、だろ？　なんで俺に、今日までに帰つて来いって言つたんだ？　他の騎士隊もいるし、昨日でもよかつたんじや」

「グレン」

「えっ？」

「グレンってよんでもぐださい。ひめさんはなんかいやす。アレクさま」

「俺も、コーリでいいです」

姫さんと言われるのが嫌で、グレンはそう進言する。コーリも勢い込んでそう言った。

「そうか。グレン、コーリ。俺もアレクでいいぞ」

明るく笑うアレクに、隣に座っていたコーリと顔を見合させて笑いあう。父は少し嫌そうな顔をしていたが渋々頷いた。

「仕方ないな。だが、娘はやらん」

「何言つてるんだよ。グレンは今年3歳だろ？　俺は今年、23歳。20歳も違うの」

「20歳がなんだ。俺の父は、25歳、離れていたけど？」

ヒートアップしていきそうな2人を止めてもりおつと、レイを見上げる。レイは呆れた風にため息を付き静かに話し出す。

「2人とも、いい加減にしないと怒りますよ」
冷たい響きに、エイスとアレクは押し黙る。と同時にグレンは思い出した。父と、レイ、シックザール宰相は幼なじみだったことを。

始まりは3歳の誕生日4

話があるからと子供達を追い出したエイスは、アレクに真剣な顔を向ける。

「どうだった？ カレイラ州は」

「料理もおいしいし、水もきれい。それに女の子も綺麗だし？ サイコーだつたぞ」

アレクは明るくそう言つてから声をひそめる。

「州を治める貴族、オーガスト伯爵は、知らないと言つていたが、あれは知つてている顔だつた。間違いなく反乱は起こる」

「やはり、そうか。起ころるなら1週間後のグレンの3歳の誕生パーティーだろうな。公式にお披露目するのは明日だが、パーティーは11州を治める貴族を招いてだからな」

考え込むようにエイスが言つた。

カレイラ州は、海に面した州で、いくつかある貿易の拠点の一つ。中でも1番王都に近い。

そのカレイラで『反乱の疑い』という報を、特務調査官からエイスが受け取つた。そこで、命令で国中を回つていたアレクに、予定になかつたカレイラを視察するよう頼んだのだ。

「そして、早ければ今日から、パーティー出席者が離れの城に滞在します」

感情の無い冷静な声で、レイが告げた。遠いところの州は、早めに出発し、王都で準備をする。また、近くの州も、離れの城、といつても王城であることから、早めに来る人が多い。

「だからか。わかった。パーティーが終わるまで、俺は、グレンやユーリを護ればいいと」

「ああ。それと、レイの息子もだ。パーティーでは3人まとめて遊ばせておくからな。部下は2人まで。その2人には、今後も護衛をさせることを考えて選んでくれ」

息子もと言われた時、レイの眉が軽く上がった。すぐに戻つたが、心配なことが伺えた。

「了解。2人見繕つてユーリ達に対面させる。で、子供達は？」

「多分、私の息子と一緒に……」

レイは目を閉じて少し考え込んだ。魔力を探つているのだ。そして、淡々と告げる。

「騎士達の訓練所に向かってます」

了解とばかりに手を振り、アレクは執務室を出て行つた。

始まりは3歳の誕生日5

執務室から追い出されたグレンとコーリーは、図書室に来ていた。茶色い趣のあるドアを静かに押し開け中に入る。

迷路のように棚が並び、天井まである棚には、隙間なく本が詰まっている。その様子に、目を奪われつつも目的の人物を捜す。

「ケン。いた」

コーリーが声を張り上げる。

「コーリー、静かにして。ここ図書室。でも久しづり」

コーリーが声をかけた先には、コーリーと同じくらいの年の少年がいた。少年もまた、黒髪黒目をしている。少年は手にしていた本を棚に戻し、コーリーに返事をする。

グレンはコーリーの横を通り抜け、ケンと呼ばれた少年に抱き着く。

「グレンも」

「ここにちは。ケン兄」

そう言つて微笑むとギュッと抱きしめられる。

「もうかわいいんだから。で、どうしたの？ 何か用？」

「用つてことはないけど。父さんに呼び出されて、アレクに会つた
帰り」

「アレクって、アレキサンドル・イーガン＝シエリ？」

「知つてんの？」

ケンはグレンから離れて、コーリーに向き直る。

「うん。朝、父様と一緒に会つたよ。騎士隊隊長らしいけど、エイス様の命で國中を回つてたんだつて」

新しい事実にコーリーの顔が輝き出した。

とてもわかりやすい顔にケンがふきだす。

「話が聞きたいんでしよう？ なら、訓練所に向かおう」

「訓練所？ どうして？」

「騎士隊の隊長でしょう？ まだ、日が高いから、エイス様とのお

話が終わつたら、そつちに向かうんじゃない？ それに、今日は、新しい魔法の実験もするんだって。父様がいつてた

「レイが？」

ケンは、レイの子供でケン・シックザール＝ベルニコフという。「よし。行つてみよう」

ユーリの決意にグレン達3人は、訓練所へ向かうドアを開けた。

始まりは3歳の誕生日（前書き）

大分時間が空きましてすみません。

始まりは3歳の誕生日⑥

訓練所まであと半分という所で、後ろから足音がした。振り向いてみるとアレクだった。

「よう、ヨーリ、グレン。ケンも一緒にだな」

「アレク！！ 今、アレクに会いに行こうと思つてたんだ」

「あと、魔法実験があるって聞いて」

ヨーリとケンがアレクに答える。

その間に、グレンが近寄つて行くとアレクに抱き上げられた。

「アレク。あるかるからおろして」

そう言つて、グレンは子供ではないと主張してみる。

「今は、2時少し前。あと、10分で魔法実験が始まる。間に合わないぞ？」

しかし、アレクは、腰に付けた時計を見てそう言つた。

若干笑つているのが腹立たしいが、見たかつた実験について言われグレンは押し黙る。

時間や、長さ、重さなどの単位は、日本、といつより、地球で多くの国に採用されていた単位と同じであつた。

時間は24時間で、分、秒があるし、長さはcm、m、重さはkgなどあるつくり同じだ。数字の桁は、万、億など、日本と同じで、無量大数まであるらしい。

それはさておき。

訓練所までは、子供の足で10分。3歳児のグレンがいるとなるとギリギリの所だ。

結局、アレクに抱き上げられたまま、訓練所に向かつた。

訓練所は、王宮の南西にある門を抜けていく。

「アレクは、國中を廻っていたんでしょ？ デジが一番食べ物がお

いしかつた？」「

「うーん。悩むな。どこもおいかつたんだが、一番なら、イリア州のヴィオレ地方かな」

道すがら、ユーリが質問する。

「ワインがとてもおいしいし、パスタも他と違つてかなりおいしい『いいな』」

日本と同じく前の食べ物が多くあるのも不思議な気分にさせた。時間や長さの単位、食べ物は、世界共通で遙か昔に栄えた文明の名残らしい。

ユーリとアレクの会話を聞き流しながら、そんなことを考えていると、いつの間にか門を過ぎ騎士達の寮が近づいていた。いつもより高い目線からは、グラウンドが見え、騎士がいつたりきたりしている。

近づいていくつれ、白い円が2つあるのに気が付いた。

始まりは3歳の誕生日♪（前書き）

遅くなつてすみません。

次はもうちょっと早く投稿できるようになります。

始まりは3歳の誕生日⑦

近寄つていくと向かって左側の円の中に、2人の青年がいるのに気付いた。どちらも背が高くアレクより少し小さいくらいに見えた。一人は茶色の短髪。もう一人は朱色の髪で、襟足が長くなっている。アレクが近くにいた責任者と思しき騎士を捕まえ、2人について聞いた。

「彼らは？」

「あ、アレク隊長。お帰りなさい。それに、コーリ様、グレン様、ケン様。いらっしゃいませ。円の中の2人は、最近入った新人騎士です。魔力が全く無いらしいので実験に協力してもらっているのです」

グレン達に笑顔で挨拶を交わし騎士が答える。

「魔力が無いのに王宮騎士隊入りか。剣の腕は上級だな」

「今日の実験つてさ、何？」

アレクの呟きを無視したケンが、騎士の服を引っ張つて尋ねる。「失礼、ケン様。今日は、遠距離用移動陣の作動実験です。魔力がない人でも動かせるかを検討します」

騎士が言つには、遠距離の移動は、神が作ったという各大陸をつなぐ魔法陣と、王都から神と賢者が住まう場所であるアカシア島までの魔法陣しかなかつた。

また、遠距離移動用の魔法陣を発動するには、かなりの魔力を消費するため、特定の人しか使えず、遠距離移動はもっぱら馬車になつていた。

そこで、魔力の無い者でも使える移動陣を開発していた、ということらしい。

「で、今日が実験です。出発地点と到着地点に陣を描き、出発地、到着地両方に外部から魔力をためます。これで、移動者が、魔力無しでも大丈夫なはずです。そして、移動者が目的地の情報を読み上

げることで発動します。今は、現在地から、東に、何mといつようになっていますが、もし成功したら将来的には、その土地の名前だけで発動するようにする予定です。今日は最初なので、距離は、100mにしてみました

「ううん。十分だよ。魔力なしで、100m移動できたらスゴいじやん」

ケンの言葉にコーリとグレンも頷く。

前を見ると、どうやら到着地に魔力を入れ終わり、出発地に魔力を注ぎ込んでいるところだった。

緊張の面持ちで見つめていると、どうやら魔力を入れ終わったらしく、2人の兵士が発動用の移動座標を読み上げていた。

読み終わると同時に、まばゆいばかりの光に包まれ、気付いたら100m先の目標地点に2人がいた。

「せ、成功だ！」

その一言をきっかけにあらゆる所から歓声があがる。

グレンもアレクの腕の中から飛び下り、コーリと跳ね回る。そこに、魔法陣の中にいた2人が近づいて来た。

「セイル班長。実験は成功みたいですね。一応、今から検査をうけますが、多分大丈夫です」

茶髪の男の言葉に、朱色の髪の男が頷く。

2人は近くでみるととてもかつこよかつた。向かって右の茶髪の方は、瞳が淡い茶色で意志が強そうな目をしている。そして左側の朱色の方は、目はとても綺麗な空というよりは、透き通った海の青で、楽しげな雰囲気が伝わってきた。

「ああ。じ苦労だった。そうだ、医務室へ行く前に紹介しよう。王宮騎士第一騎士隊隊長のアレキサンドル・イーガル・ツエリ様。また、こちらが、コーリ王子とグレン王女、宰相閣下子息のケン様です」

そう言つたセイルに、2人は姿勢を正す。

「こちらの2人は、向かって右がリヒト・フリューゲル。左が、ジヨシュア・フューレンです」

セイルの言葉に2人は軽く礼をする。

「リヒトにジヨシュアか。俺のことはアレクでいい。これからよろしくな」

「はい。よろしくお願ひします」

2人の声は綺麗に重なり青空に響いた。

始まりは3歳の誕生日⑧

明日のお披露目用の衣装を選ぶということで、部屋に3人を送り届けアレクは医務室に急いだ。

少し駆け足で、医務室のドアを開くと、検査は終わったのか2人は騎士のアンダーである、焦げ茶色のハイネックのノースリーブ姿だった。

「アレク隊長。そんなに急がれてどうしたんですか？」

リヒトが着替える手を止めてアレクに尋ねた。

「ああ。お前達2人に頼みたい事があつてな」

「頼みたい事、ですか？」

アレクは、側にいた医師に部屋を出ていくように頼み2人に向き直る。

「ああ。今週末に、グレンの誕生日パーティーがあることは知っているな」

「ええ。グレン王女の3歳の誕生日パーティーですね」

ジヨシュアが頷く。

「そのうえ、カレイラが反乱をおこそうとしている疑いがある」「物凄い重要な情報をさらつとアレクが告げた。その情報の重要性を理解した二人の顔が固まる。

「そんな情報を軽々しく話していいんですか」

「というか、引き返せない状況に追い込んで何させるつもりですか」「焦つたような顔の二人に、アレクは笑いながら告げる。

「喜べ。お前らを王子、王女、宰相閣下子息の護衛に任じる」

アレクは満足気な顔をして、引き攣ったような顔の二人を眺めた。

始まりは3歳の誕生日⑨

国民へのお披露目も滞りなく終え、自室までの長い道を歩いていた時、グレンの前にカレイラ州を任せている貴族、オーガスト伯爵が現れた。護衛なのか、兵士を一、三人引き連れている。鎧は無いが、引き締まった身体から相当の実力が見てとれる。しかし、グレンはその兵士に違和感を感じた。主である伯爵じゃなくこちらを探るよう見てくる。

恐怖を感じ今日だけで護衛になつたジョシュアの後ろに隠れる。

「これはこれは。グレン王女ではありませんか」
大袈裟な動きをつけて寄つて来た伯爵は、明らかに待っていたのに、さも偶然であるかのように声をかけてきた。

オーガスト伯爵は見たところ50代。鏽びたような赤色の髪に、同形色の口髭を生やしていて、田はくすんだ翠。州を統治する貴族にしては品の無い田をした伯爵に、グレンは嫌な予感を覚える。

「何か御用ですか？」

ジョシュアが尋ねる。伯爵はジョシュアに冷めた視線を向けた後、グレンに笑いかけてくる。グレンは、その笑顔にどこか冷たい印象を受けた。

「いえいえ。何もございませんよ。偶然お会いしただけですから」
そして笑顔のまま、ねつとりとした絡み付くような言葉遣いで話しかけてくる。

「では、失礼します」

そのまま去つていいくのをグレンは胸騒ぎを覚えながら、見送った。

始まりは3歳の誕生日ー0

パーティー当口。

グレンは、ノースリーブのかわいらしい白いワンピースを着ていた。胸元には3段のフリルの上にピンクの花が綺麗にならび、スカートの裾にもかわいらしい刺繡がほどこされている。ウエストは王家と宰相一族にのみ許されている、黒のリボンを巻き、後ろでリボン結びにしている。

護衛にはパーティーの主役だからかアレクがついてくる。

「イーガ第一騎士隊隊長。視察はどうでしたか？」

「オリヴィア伯爵。ええ、話をしたいのはやまやまなんですが、今は護衛任務中なもので」

「アレク。いいよ。わたし、コーリにいたまとおはなししているから」

グレンの言葉に一瞬アレクは黙り込むが、すぐにコーリの護衛についていたジョシュアをこちらに呼んだ。ジョシュアは側にいたケンの護衛についている、リビトに田で合図をしてからかけてきた。「ジョシュア。済まないが少しの間、グレンお嬢様を頼む」「声に出さず、深くジョシュアは頷きグレンを促してコーリたちがいる方へ歩き出した。

コーリたちの元へたどり着き、アレクの方を見ると軽く微笑まれ、それからオリヴィア伯爵に向き直り話し始めた。

「グレン。どうしたの？」

「アレク、おはなしあつだから、にじさまにあいにきた」

「もう、なんてかわいいんだ」グレンの言葉にコーリが抱きしめてくる。3歳児では苦しいくらいの力に田でケンに助けを求めた。「はいはい。コーリ。グレンが苦しそうだよ？」

ケンの言葉に力が緩められ抱きしめられていた腕の中から脱する。

「ケンにいさま、ありがとう」
「どういたしまして」

感謝の言葉に優しく微笑まれてグレンもつられて笑った。

パーティーが始まつてそろそろ2時間。会場隅にある振り子時計
が8時を指すから間違いない。

アレクがこちらをちらちら見ていたので、かわいそうだからアレ
クを拾つて、子供達は退散しようといふところで、コーリーが言い出
した。

「テラスで、空をみよっよ」

「はあっ？」

ケンが不思議そうな声を出す。それを見てコーリーが説明しだす。

始まりは3歳の誕生日1-1（前書き）

累計10,000pv突破。

ありがとうございます。

更新もかなり遅いのに。

これからも頑張って行きます。応援よろしくお願ひします。

始まりは3歳の誕生日ー1

こつものベッドに入る時間では、空も見れない。普段は、別に見なくてもいいけど、今日はフリュール流星群の日だし、グレンの誕生日だから、見せてあげたい。

「ということらしくよ？」

ユーリの支離滅裂な言葉をケンが綺麗にまとめてくれた。

フリュール流星群は、年に4回起こる流星群の一つで、西のアステイア大陸の空いっぱいに流れる流星群だ。

本で読んだだけの流星が見られると聞いてグレンは、ワクワクが止まらなくなり、リヒトとジョシュアを見上げる。

「その目で見ないでください。わかりました、わかりましたから

「少しの間だけですよ？」

優しい返事に浮かれるグレンは、ユーリに抱き上げられテラスへと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296s/>

神は何を思う？

2011年10月10日02時11分発行